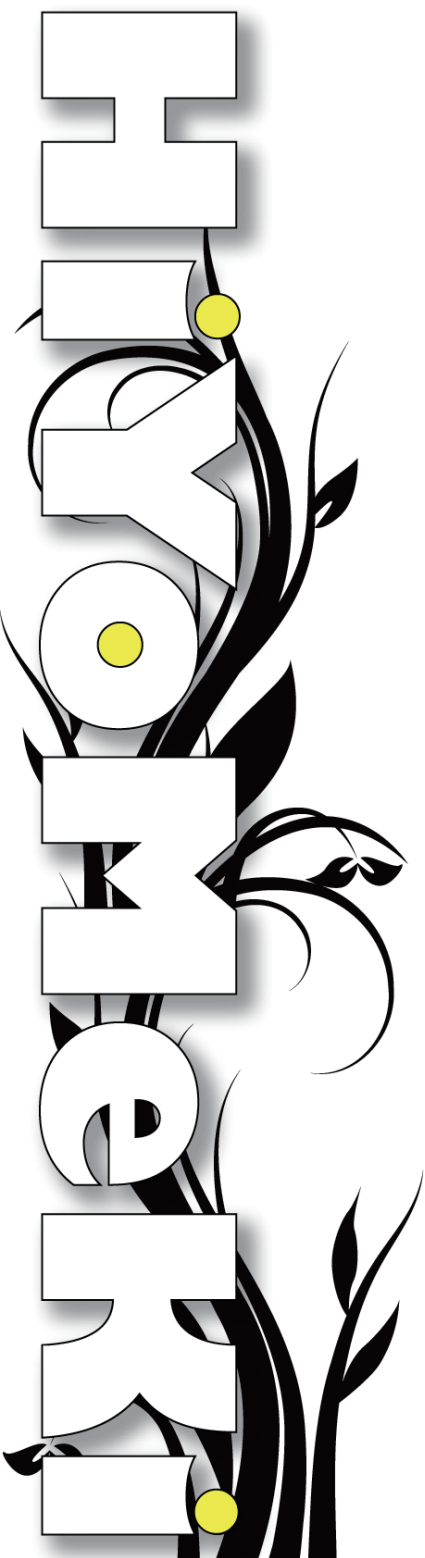


Vol. 1



はじめに

水城ゆう

「次世代作家養成塾」発の電子マガジン初号を、ここにおとどけます。

いろいろと書かなければならないことがあります。最初にお付き合いいただくなり、塾生たちの多彩な作品を楽しんでから読むなり、お好きなようにどうぞ。いずれにしても、どこから読んでも楽しんでいただけるようにできております。

マガジンタイトルについて。

『HYoMeKi』は「ひよめき」と読んでいただいかまいません。

試しに、コンピュータのキーボードから「ひよめき」と入力して、変換してみてください。見たこともない漢字が出てきてびっくりすると思います。

「顛門」ですね。

赤ちゃんの頭を触ったことはありませんか？ 私はありません。

赤ちゃんの頭蓋骨はまだ柔らかく、大人のようにがっちりとは接合していません。頭蓋骨の合わせ目が離れていて、触ればすぐにわかります。そして、「泉門せんもん」という場所の皮膚をよく観察

すると、心臓の鼓動にあわせてひくひくと脈打っているのがわかります。

そこを「ひよめき顛門」といいます。動いているので「おどりこ」といったりもするようです。

まさに次世代作家養成塾のありようを象徴するような言葉なのです。

私たちは文章を書くことを「表現行為」のひとつとしてとらえています。音楽を演奏したり、歌ったり、踊ったり、絵を描いたり、といった表現行為と同等のものとしてかんがえます。

文章を書く、というと、とかく大脳皮質の論理的な思考回路を使って、知識や経験を駆使するようなイメージがありますが、表現行為である以上、その人固有のマインドや身体性が重要であることはいうまでもありません。ところが、これまでテキストライティングの分野において、あまりそういうことは重視されてこなかったように思います。

表現はふたつのパートで構成される、とかんがえます。ひとつは「技術」で構成されるパート。文章構造だの、視点だの、キャラクターだの、描写法だの、時制といったものですね。これはだれでもひとしく学ぶことができます。

もうひとつは「固有の身体性」で構成されるパートです。身体性のなかには、感性や感情といったものも含まれます。これはひとりひとり違います。どんな人でもオリジナルなものです。まさにその部分に光をあて、ユニークでオリジナルな文体や発想やストーリーを汲みあげる方法を探すところから、私たちはスタートしたいとかんがえています。

その出発点は潜在意識と顕在意識が混沌とないまぜになった場所にあります。私たちは頭を柔軟にし、まさにまだ頭蓋骨がくっついていない赤ん坊のように混沌とし、しかし無垢なところか

ら始めたいのです。

『HiYOMeKi』にはもうひとつ、ひっかけてある言葉があります。

新美南吉に「一年生たちとひよめ」という短編があります。ごくみじかい童話です。ここに書かれている「ひよめ」というのは、水鳥のカイツブリのことです。

一年生たちが毎日、学校に行く途中、池に浮かんでいるひよめに歌います。

「ひよめ、ひよめ、だんごやるに、くぐれ」

団子をやるから水に潜れ、というわけです。するとひよめたちはくると水に潜ってみせます。でも、子どもたちは実際に団子を与えるわけではありません。団子など持っていません。

ある日、学校の先生が、こわい顔をして、

「うそをついてはなりません。うそをつくと、死んでから赤鬼に釘抜きで舌ペロを引っこ抜かれるです」

といいます。子どもたちは素直に「わかりました」と答えます。

その帰り、やはり池にひよめが浮かんでいたのです、いつものように歌おうとして、ハタと気がつきました。団子を持ってもないのに潜れというのは、嘘をつくことになるからです。困った彼らは、次のように歌をかえて歌いました。

「ひよめ、ひよめ、だんごやらないけど、くぐれ」

するとひよめたちは、やはりおなじように水にくると潜ったのです。そして子どもたちは、ひよめが団子めあてにくぐったわけではない、自分たちに呼びかけられるのがうれしからくぐっていたのだ、とわかるのです。

私たちがもなにか報酬がほしいからものを書くのではありません。ただ書きたいから、自分を表現したいから書くのです。その結果、だれかがそれを読んでくれ、喜んでくれたら、こんなにうれしいことはありません。また、読んでもらった結果、「つまらない」という反応もあるかもしれませんが。それはそれでやむをえないことです。読者の反応は書いたものの責任ではありません。あらかじめ反応を予測して狙って書いたり、売れたりうけたりすることを狙って書いたものほどつまらないものではありません。私たちはそのようなものを書くつもりはありません。

『HYOMeki』初号からは十二作品を送り出すことができました。

まだまだ未熟な作品もあれば、技術的にプロ作家とひけを取らない作品もあります。実際に商業活字出版の世界で著者として原稿料を取っていた人もいます。

いろいろな作品がならんでいます。いづれにしてもこれらを私は「技術の優劣」のみで選定したのではない、ということをお断りしておきます。もちろん技術的完成度は重要な要素ですが、それ以上に、「書き手そのものの身体性」を重視しています。つまり、そのテキストを読んだとき、行間から書き手の存在が立ちあらわれてくるかどうか、ということ。そこから書き手の体臭や手触りを感じることができるとか、ということ。です。

次世代作家養成塾はまだ始まったばかりです。塾生は目をみはるようなカーブで成長しはじめています。これからも定期的な作品集としてのマガジン『HYOMeki』をお送りしていく予定です。そして、これを読んでいるあなたも参加してみてください。どんな人もそれぞれがユニークな存在である以上、ユニークな表現者になりうり、というのが私の信念です。

(次世代作家養成塾・塾長)

目次

水城ゆう はじめに

野々宮卯妙 美齡は遠くへ行きたかった

久保りか 献血

奥田宏二 親指

石川月海 出会う

山田みぞれ 肥満

倉橋彩子 肥満

三木義一 肥満

野々宮卯妙 帆立貝

船渡川広匡 三つ網

オマンタの花嫁

風の谷のナントカ

肉人間

★

お題「三つ編」で書かれた作品。

中国の話ですが、日本にもこのような時代があつて、それはその時代を知らない若い人にとつてもどこかノスタルジックにちくちくと心の奥を刺激します。

「ですます」調でわざと子ども読みの物風に仕立てたところが、ラストの悲劇のコントラストを強くしました。読後、いろいろなものが心に残り、作者が大事にしていることがなにかということが伝わってくるような作品です。(水城)

美齡は遠くへ行きたかつた

野々宮卯妙

美齡メイリンは毎日朝七時に、自転車で工場に出勤します。

家から三十分、黒くて重い自転車のペダルをぐんぐんと踏みます。

お給料をためて、フレームが細くて軽い、赤い自転車を買いたいと思うこともあります。でも、買ひ物は我慢しています。貯金をするからです。

「そんなに貯めてどうする。服も買わないくせに。使いみちがないのなら、もつと家に入れる」

お父さんが言います。

でも出しません。

これは、美齡の進学資金なのです。でも、そのことは誰にも言いません。馬鹿にされるに決まっているからです。

美齡は、学校の成績は良い方でした。でも、上の学校には行きませんでした。両親は学費を出してくれませんでした。

都会の子に生まれればよかった。

一人っ子には祖父母の四つのポケットがあると云うけれど、それは都会の裕福な家庭の話です。美齡の祖父母はもう亡くなったし、生きていたとしても貧しい農民でしたから、美齡のために、それも教育のためにお金を出してくれはしなかつたでしょう。

だから美齡は、工場に勤めて自分でお金を稼ぎ、貯めます。

美齡は、長い長い、長い髪を三つ編みにしていました。小さいころ、髪の毛が売れるという話を聞いて、伸ばし始めたのです。

自分でお金を稼ぎたいと思ったとき、どうしたら稼げるのかわからなかつた美齡が、唯一できることでした。

それからずっと切りません。毛先が痛むので思いのほか伸びませんでした。三つ編みにしてほとんどくるぶしにつくほどでした。

何があっても、この毛さえあれば。

朝七時、美齡は工場に出勤しました。

機械を動かし、監視しながらラインからこぼれたものをラインに戻します。

今日は、機械の調子が悪いようでした。ラインからこぼれるものが多く出ました。美齡はいちいちラインへ戻すたび、監視の集中力が切れるので、不安が増してくるのを感じました。

気付くと、こぼれたものがどんどん先へ流れていました。

美齡は、ふだんほとんど動いたことのない自分の立ち位置から、五歩、ラインに沿って踏み出しました。

それは、美齡が自分で初めて踏み進めた五歩でした。

五歩歩いたところに、回転ギアがありました。次のラインへの接続ポイントでした。

こぼれたものをラインへ戻して、美齡が元へ戻ろうと振り返った時、ギアに触れたものがありました。

美齡の長い長い、長い三つ編みが、ギアにしゅるりと巻きつきました。

ギアはしゅるしゅると回って三つ編みを巻き込んで行きま
きました。

声を出す間もなく、美齡はギアに噛まれて行きました。

★

お題「献血」で書かれた作品。

不思議な感触の作品です。皮膚感覚がうまく表現さ
れていて、読む者は自分の指の痛みや、吸われる感
触を思わず想像してしまいます。

訪問介護という、いまではそう珍しくはないシチュ
エーションですが、ここで起こるのは奇妙なことです。
しかし、事件というには小さなできごと。でも、不
思議なこと。この皮膚感覚をともなったエピソードを思
いついたところが、作者のユニークさであり、オリジ
ナリティでしょう。（水城）

献血

久保りか

前田さんは、しゃべらない。

無口というより無表情だし、意図的にしゃべってくれない、気がする。

介護福祉士という仕事を選んだ動機が想像できない……と、運転席の横顔を見つつ思った。

私は、訪問ケアのアルバイトをしている。

企業が運営しているもので、難しいケアは資格を持った社員がしてくれる。

今日は、前田さんと二人きりだ。

訪問先は、古いマンションの一階の一室だった。

前田さんは、仕事用の笑顔を作って、話しかけている。

「マリさんこんにちは」

マリさんは、椅子に座って、金色の杖をついていた。声はか細いけれど、表情は優しげだ。

こう綺麗にされているのなら、入浴介護はなしだろう。仕事としては、楽そうだ。

だけれど、訪問介護が必要な独居老人、というにはなんだか妙だった。

第一に、部屋が殺風景で、家具だけが豪華で浮いている。

第二に、マリさんは随分とおきれいだったのである。

銀髪がくるりと巻かれていて、フリルのワンピースに、金のアクセサリー。

いい所の奥様だったのだろうか。

マリさんは、私と目が合うと微笑んでくれた。

「お手玉しましよようよ」

言いながら綺麗なお手玉を取り出した。

前田さんは他の仕事があるのだろうか、立ち上がり出て行ってしまった。

「あなたは、そちらにお座りなさいな」

指された椅子も、布張りの美しいものだった。

お手玉を受け取ると、マリさんはやってみせて、とせがんだ。

私は満面の笑みを浮かべながら、三つ、両手でひよひよいと投げて受ける。

マリさんの反応を伺おうとした途端、指に痛みが走った。

「いたっ！」

声を上げてお手玉を落とす。

後から考えたら、お手玉に針が仕込まれていたのだと思うけれど、すぐに、考える暇もないようなことが起こった。

マリさんは、私の手をグイと引っ張ると、口に入れたのである。

細い悲鳴をあげるが、思いのほか力は強い。

ここで私が力任せに引いたら、マリさんが転倒する。咄嗟に固まると、マリさんは、ちゅうと音を立てた。血の出た指を吸っているのだ。

目を見開いて、小鼻を広げて、一心不乱に吸っている。

舐めているのでも、噛んでいるのでもない。痛くは、なかった。

身を献ずる精神で、というのには理解していたけど、ま

さか血まで献ずることになるなんて。

(だから献血っていうのか)

子どもの頃、怪我をした場所に口をつけて、血を吸ったことがある。

「ゲゲゲの鬼太郎」に出てくる吸血鬼が、ワイングラスで飲んでいたのが、おいしそうに見えたからだ。

よく怪我をするものだから、吸う機会には事欠かかったけれど、そのたびにおいしいものではないかと思っただ。(吸われる側のことは、考えなかったな)

食い込む指が、痛い。

「マリさん、おいしい……？」

マリさんはうっとりともふたを閉じて、答えてくれなかった。



お題「親指」で書かれた作品。

父の死、葬儀、父の吸い残した煙草、そして親指。こういった「アイテム」の処理が大変功名で、心地よい読後感のある作品となっています。おそらく、商業作品としても、気の利いた雑誌掲載程度のレベルはクリアしているでしょう。

しかし、私たちが目指しているのはそこではないのです。作者はこのしっかりした力を、オリジナリティへと向けていってほしい。(水城)

親指

奥田宏二

ブレーキランプが何度か点滅すると、その光は、遠く他の光と交じり合い、次第に見えなくなつた。

洋介は呼吸の中に遠く読経の音が聞こえた様な気がして、道の向こうに見える生家に目をやつた。

葬儀屋の仕事は見事なもので、すでに葬儀の名残は跡形も無かつた。

これで洋介は、父、母、共に失つたことになるが、洋介にその実感は、まだ沸いてこなかつた。

東京の一戸建て。とはいえ東京都下の田畑に囲まれた一軒で、近隣の目標物が洋介の生家という、大きいだけが取り柄の家である。

ひととき大きな庭の柳が、ここからでも風になびいて

いるのがよく見える。

柳がゆれる度、青い生家の屋根が見え隠れするのだが、あらためてよく見ると、洋介は自分の記憶より屋根が幾分か古く煤けていることに気が付いた。

相続問題は一切もめることなく、洋介が引き継ぐということで、あつげなく片付いた。

喪主は洋介だったが、取り仕切ったのは殆どのところ、叔父だった。

今後やる事を一通り説明し終えた叔父は、日が傾き始めたころ、黒塗りのBMWで帰っていった。

「隆、早くおいで」

叔父の車を追いかけていた息子は、いつの間にか道端にしゃがみこんで、何やらゴソゴソやっている。

息子の興味はすでに、叔父の車から、道端の小石に切り替わっている様子だった。

まあ急ぐことも無いか……

何かに夢中になっている息子をぼんやり眺めながら、洋介は胸のポットからタバコを取り出し火をつけた。

これは父の部屋から拝借した最後の一箱である。

ハイライトはいつものマルボロと違い、洋介の肺に重く押し掛かって来たが、次第にその重さも心地よくなってくる。

洋介もまた、父と同じく、愛煙家だった。

道端にしゃがんでいた息子はいつの間にか洋介のそばで木の枝を振り回していた。

「隆」

そう呼ぶと、洋介はわざと息子が自分の親指を握るように手を差し出した。

洋介は不意に、昔この道を父の親指を握って歩いたのを思い出していたのである。

息子はそれが当たり前の様に洋介の親指を握ると、体を傾かせながら洋介に引きずられるように歩いた。

ゆらゆらとしばらく歩いてしたが、息子は突然家のほうに向かって大声を出した。

洋介は声の先を見ると、いつの間にか庭に出ていた妻がこちらに向かって手を振っている。

ああ、この光景もみたなあ……

しみじみとその光景を感じていると 洋介は煙の先に
父の気配を感じたので、

そこに行くのはまだまだまだ先だよ……

何となくそう呟いた。

親指で繋がれた親子の見上げる先には、タバコを煙らせる
お互いの父の姿があった。

★

お題「肥満」で書かれた作品をいくつか、つづけて
お送りします。

その一。

よく描かれたスケッチは、その前後の物語や、登場
人物の世界全体をうまく想像させてくれます。なので、
スケッチはなるべく具体的な手触りがほしいのです。

この作品は手触りが具体的であり、描かれているシ
ーンの空気や登場人物の匂い、繊細な気持ちの揺らぎ
といったものが非常に緻密に構成されています。

読者にスケッチの前後のストーリーを想像させてく
れる「スペース」があることも、作品の質を高めてい
ます。(水城)

出会う

石川月海

ながらエンジンをかけた。聞いたことのない外国語の曲が流れて、エアコンが息をし始める。

それから、彼は、助手席に向き直ってわたしを見つめた。

わたしも見つめた。

やさしさを漂わせようとしている瞳。まじめそうに閉じられた口。薄くもなく暑苦しくもない唇。髭は剃り跡さえない。

細身の体にフィットしたシャツは、奇抜ではないけれど細かな柄で、彼を年齢より若く見せている気がする。

シャツの袖から伸びた腕は無駄な脂肪がなく硬くて丈夫そうだった。大きな手のひらと器用そうに長い指のせいか、手首が少し華奢に見える。

腕時計はちよつとイイモノなのかもしれない、そういえば車も安っぽくはない。

お互いを見つめ合う間、顔にはあいまいな笑顔を作っていたつもりだったのだけれど、それがかえって心細げな印象を持たせたらしい。にっこり笑った彼は、

「だいじょうぶだよ」

助手席のドアを開けた彼は、車に乗り込むわたしの背中にと手を添えた。

薄い布地を隔てて触れ合う彼の手のひらとわたしの背中。 やつと会えたんだと実感してとても安心したのと同時に、だれにでもこんな風にやさしいのかな、という不安がよぎった。

すぐに車内を見回してみた。

後部シートに彼の上着が投げ入れられているだけ。

太陽をまつすぐにはね返していた外観同様、きれいに片付けられ、掃除されている。不安がまた一回り大きくなった。

彼は、運転席に乗り込むと、「今日も暑いね」と言い

と、何に対する答なのかわからないセリフを発して、
左手をわたしの頭に乗せた。

いた。

不安は期待でもあった。

今、彼の手のひらは、わたしの髪を押さえつけながら、
ゴシゴシと動いている。まるで手のひらについた何かを
なすりつけているみたいに。

一瞬だけ上がりかけたテンションが、上昇しかけてい
たことを反動にして一気に落ちた。

やさしい指の感触を期待していた頭皮は、がっかりし
すぎて、触れられた事実を抹消しようときさえしている。

こんな不満なんてきつと些細なこと、と自分に言い聞
かせてみた。

幸せを探しすぎて、理想のBMIが高くなりすぎてい
るだけ。

せつかくこんなに来たのになあ、とすでに終
わりを目指しているわたしの気持ちなど知るはずもない
彼は、「直行していい？」とどこかへ車を走らせ始めて

★

肥満

山田みぞれ

お題「肥満」で書かれた作品、その二。

読書というのとは一種の疑似体験です。山田みぞれのこの作品は、質の高い疑似体験を読者に提供します。それはなぜでしょう。

彼女の実際の体験を、テキスト表現というアウトプットに「昇華」させ、ある一定の普遍性を持たせて提供しているからです。

作品として欠点がないわけではありません。むしろ多くの欠点があります。が、ものを食べる描写において質の高い昇華が成功しているので、読む快感を読者に提供しているのです。

これは山田みぞれの身体感覚の表現といってもいいと思います。(水城)

六枚切りの食パンにジャム、バター、バター、ジャム、チーズとバター、ジャムの順でぬって食べる。今朝はどうしてももう一枚口にしたいくて、買い置きの方を開けてしまった。

雪絵は冷蔵庫からハムを取り出した。食パンにバターをまんべんなく塗り、うっとりしながらハムを挟む。そして両掌でぎゅっと押しつぶす。指の腹も使い丁寧に、できるだけぺたんこにする。

指の痕でこぼこになったサンドイッチにかじりつく。バターとハムの擦れあつた部分が舌に絡まると最高に幸せ。鼻の穴を膨らませて、雪絵はサンドイッチを頬張った。

今日の定食、何だろう。昨日の社食には騙された。ハンバーグと見せかけて、豆腐ハンバーグだった。そりゃ豆腐だとカロリーオフになるけど、お肉だけの方がおいしいに決まってるじゃん！ロースカツか生姜焼きがいいなあ。今朝はパンだけだもん。絶対お腹空いちやう！名残惜しいがサンドイッチを飲み込み、雪絵はサブリメントを牛乳で片付ける。

胃の辺りがぐぐつとろろく。口を半開きにしたまま、雪絵はテーブルに突つ伏した。引きずるように頭を持ち上げる途中、目に入ったのは服を着たままでもわかる、三段に割れた腹だ。

深く短い息を吐き、雪絵は両手をテーブルにつきのっそり立ち上がった。空になったグラスが揺れた。

★

お題「肥満」で書かれた作品、その三。

現代の商業流通ルートに乗っている小説は、ほとんどが「難解＝わかりにくさ」を排除されています。書き手が編集者から要求されるのは、わかりやすさ、明快さ、はつきりとした結末、といったものです。

この倉橋彩子の作品は、この短さにも関わらず、視点が入りくんでいます。時間軸も交差しています。説明が極端にはぶかれ、読者はなにがどんなふうにな、だれの目を通して起こったのか、注意力と想像力を駆使しなければ読みとくことができません。

このような書き方は商業作品とは逆行していますが、なに、それでかまわないのです。倉橋彩子はなんの遠慮もなく、読者にこびることなく、自分の表現をおこなえばいいのです。

そういう意味で、倉橋彩子はどんどんオリジナリテイを磨きあげつつある書き手です。(水城)

肥満

倉橋彩子

ハイビスカスが咲き乱れる庭に、雨のしずくがそつと舞い降りる。どこに在るのかわからなくなるような午後、ポーラの意識が遠のいていく。

タミが、来たときよりは幾分かすつきりとした表情でポーラの家を出たとき、独特の匂いが風にのつてやってきた。牛乳のスープを煮詰めて2日くらい置いておいたような、吐き気をもよおす、しかしなじみのある匂い。匂いのするほうにちらつと目をやると、青白いぶよぶよの皮膚をした、豚のような男がいた。ああいやだ、タミは悪態をついた。ひと月も待つてやつとこの島一番のシャーマンに会ったばかりだとういうのに、どうして出たとたんいつもと同じ病棟の匂いを嗅がなきゃいけない

いんだらう。あの男は長くない、臍臓か、腎臓、ガンの匂いだ。強烈な匂いだからもう長くはない。ああいやだ、そんな人間がここに来る必要なんてないのに、こんな人がくるから長いこと待たされたんだわ。タミはすれ違ひざま、わざと大きくためいきをついた。男がその後、立ち止まってじつと自分の後ろ姿を見ていることには気づかず。

幼い頃、エテルはともかわいかった。ポーラは、うさぎに似たエテルをいつもかわいいなと思つて、見かけるたびに走り寄つていった。今日の前にいるエテルに、その面影を見つけることは難しい。ハリを失った肌からは、生命のエネルギーは感じられず、身体を覆う大量の脂肪は溶けて血液に流れ込み、全身に虚無を巡らせていた。

「なんで治せないんだ！」

拳が叩き付けられたテールが、波打つように揺れる。「エテル、わたしに出来ることは全てやったわ。出来ることをして、後は神に任せるしかないの。絶対にあなた

を助けるなんてわたしには言えないし、誰にもわからない

いのよ」

「嘘だ！ お前は村一番の魔術師なんだから、治せないはずはない。ナナコシ村のヤン婆さんも治したって聞いた。俺だけ治せないなんて訳がない。手を抜いてるんだ、俺がこんなに苦しんでるのに……」

「エテル、手を尽くしてるのはわたしだけじゃない。猫を飼ってるでしょ、もうおばあちゃんの。彼女もあなたを助けるために、貴方の身体から腫瘍を自分の中に取り込んでるのよ。貴方が助かるかどうかは別として、彼女の魂は貴方を助けたくてそれを選んだの」

血の気のなかつたエテルの顔と首に、一気に赤身がさした。

「嘘だ！ 嘘だ嘘だ！ お前は嘘つきだ！ 俺のせいでフランが死ぬって言うのか。嘘だ！ 嘘だ……」

テーブルの上の花瓶を見つめて、エテルの右手が伸びる。衝撃音と共にポォラが椅子から横に滑り落ちる。

窓の外に映るハイビスカスの緋が眩しくて、エテルの

目から涙がこぼれ落ちた。

★

肥満

お題「肥満」で書かれた作品、その四。

三木義一

この作品は、文章の性質としては「詩」の範疇に
入れることができるかもしれません。

詩には「言葉を使う」という以外にはなんのルール
もありません。制約もありません。自由な世界です。
それゆえに、そこに出してくる言葉の並び方には、書
き手の個性が出ます。というより、書き手のむき出し
の言葉がそこにならぶことこそ、詩の目的であるとい
ってもいいかもしれません。

この作品から、作者そのものが伝わってくるでし
ょうか。

かなり伝わってくるように感じますが、もっと彼ら
しい言葉もありそうですね。表現の深さのレベルが何
段階かあるとすれば、深部表現の階段をまだまだ降り
ていけそうな気がします。(水城)

母の白髪と私の胸毛、
選ぶのは私の自由だといいい聞かせながら
池の畔を歩いている。

肋骨が性交渉を始める。
軟骨は冷え性で縮こまる。
肉はまわりでそれをじっと見守っている。

私は
手の届く限りの肉を掴んでは水に放り投げる。

じゃば
がぼ

何もしようとしな、この熱の塊を憎んだ。
血に上下はない。

肉に貴賤はない。

そうは知っていても

私は執拗にそれを切り離そうとする。

水面がもわもわと沸き立つ。

一方で私は、耳朶の裏のしわをやさしく愛おしむ。

全ての記憶はそこに保管されているから。

その深さ、感触を確かめたついで。

ひねもす。

じゃぼ

がぼ

どぼ

もう投げるものがない。

かたちを失って私は立ち止まる。

あたたかい骨が

つめたい肉が

私の輪郭だったのか。

否、

透明な血管が

鈍角の集合が

肉への重力が

私の輪郭だったのか。

耳の裏であろう場所をまさぐり、放り投げる。

すうーっと湯気が細い糸を引くように立つて

水面は静かになった。

波打ちぎわは緩やかに伸び縮みを繰り返している。

池の大きさは1mmだつて増えちゃいない。

★

帆立貝

お題「肥満」で書かれた作品、その五。

野々宮卯妙

この作品は、たぶん、意識的に客観描写の実験をしているのだと思います。客観描写だけでどれだけのことを伝えることができるか。こういう練習は、書くことの大きな練習になります。

それにちよつとエロティックでぞくぞくしますね。ぎりぎり下品に落ちていないところがいいし、また説明を意図的に限定していることで、これが男女なのか、女同士なのか、含みを持たせているところも、読者の想像をうまくかき立てています。

もつとも、これは二十世紀前半の手法であつて、世界文学全体としては二十世紀後半から二十一世紀にかけ、さらにさまざまな手法が現れてきました。なので、客観描写だけにしがみつくと必要はありませんよ。あくまでも手法のひとつとして身につけておいて損はない、ということですよ。(水城)

艶やかで滑らかな表面に、指をそつとおろす。

指先をゆつくりと押しこんでみる。指の腹を中心に、柔らかなすり鉢が生まれる。底の皮を隔ててみっちり詰まつた身を撫でる。

ともすれば、もっちりとした弾力に指は押し返され、すり鉢を浅くする。

指を押しつけながら、右へと滑らせる。一ミリずつ、慎重に。

「くすぐりたい」

口角が上がるのを筋肉を固めて留めようとすると、指が滑り、深く押しこむことになった。

「いたい」

「ほんとに?」

「……ううん、うそ」

このまま指を押しこんでみたらどうだろう……温かくて柔らかなものに指が呑みこまれ、一体になってゆくようすを想像してみる。

「ちがうよ」

「なにが？」

「温かくないよ」

指先から思いが皮の向こうに伝わってしまったようだ。

「そうなの？」

「ほら」

親指と人差し指と中指で、手頸をつままれ、ぐるりと向こうへ回された。

「……ほんとだ」

滑らかなだかひんやりとして、広々とした感触に出会った。

指を上へと滑らせ、てのひら全体を押し当てると、じわりと体温が吸われていった。

「あ……これ」

もう片方の手を反対側から差し入れ、両のてのひらで白く広がる肌を抱え込み、きゅっと力を入れた。

そこはまるで、ひんやりとして広々とした、柔らかい大理石の床。

ヴェーナスの尻。

顔を拭い、櫓を巧みに動かす。小舟は波の合間を縫って
するりと抜けていく。

ようやく納得する場所まで来ると、足元の網を両手で
持ち上げ、宙へと飛ばす。網は生き物のように広がり水
面をつかむ。網が十分に沈むのを待ってから一呼吸置い
てぐいと引つ張る。両腕の褐色の筋肉が盛り上がり、筋
立つ。

網を巻き戻し船上にどちやりと落とすと、中には小魚
が十数匹踊っている。

老人は二つ目の網を海へと投げ、引つ張る。獲物がか
かった網が巻き上げられる。更に三つ目の網を投げる。

彼にはかつて三人の息子がいた。

長男が十五歳になった時、新しい網を与えた。最初の
漁に出た時、ふいに来た大波にさらわれた長男はもう戻
っては来なかった。

妻は嘆き悲しみ海を憎んだが、夫は「息子は海へ帰っ
た」と言っただけだった。

次男が十五歳になった。夫は彼に新しい網を与え漁に

出ようとしたが、妻は網をどこかに隠し、島の木の実を
とる仕事を次男に指示した。次男は山へ分け入り木の実
を探したが、崖から転落して死んだ。

妻は嘆き悲しみ山を憎んだが、夫は「息子は山へ帰っ
た」と言っただけだった。

三男が十五歳になった。夫は彼に新しい網を与え漁に
出ようとしたが、妻はまた網を隠し息子に家の仕事を指
示した。三男が屋内で糸車を回していた所へ百年に一度
の大地震が起き、倒壊した家の下敷きになつて死んだ。

妻は嘆き悲しみ大地を憎んだが、夫は「息子は大地に
帰った」と言っただけだった。

老人は足元に打ち投げた三つの網の中から手早く魚を
仕分け、びくに入れていく。

盛り上がった二本の腕が巧に縄を巻き上げ、帆を張る。
帆は浜風を捕まえ、舟は波を切つて進む。浜にたどり着
くと、最後の力で船を砂浜に押し上げて縄で杭にくくり
つける。

小屋の入り口を開け、びくを土間に置く。老人は服を

脱ぎ手拭いで体をふき取る

と、裸のまま寝台に静かに横になった。

老人は目を閉じた。やがて彼の意識はまどろみに沈んでいった。

老人は息子達の夢を見ていた。

オマンタの花嫁

船渡川広匡

黒くてでかい穴が二つ空いている。

鼻の穴だ。鼻毛がぼうぼうに飛び出ている。その二つの鼻の穴を横から一本の長い棒が貫通している。

彼の浅黒い顔にはしわが年輪のように刻まれている。薄くなつた白髪に鳥の羽根をつけている。貝殻を繋げた首飾りは、この山村においていかに権力を持っているかを示している。彼は猛禽の様な威厳を持って椅子に座つ

ていた。

隣には褐色の肌をした年若い娘が決然と立っている。花飾りを髪につけ、赤く鮮やかに染め上げられた布をまとっている。

半裸の若者が、その前にあぐらをかいて座っている。

大勢の村の男達が三人を取り囲み、白く大きな目を注いでいる。長老が何事かを皆に向かって発すると、男達は沈黙した。

長老はたつぷりと息を吐き出してから、鼻に刺さっている長い棒に手をかけた。そしてゆっくり、ゆっくりと引き抜いていく。棒が抜かれる方向に鼻の脇の肉が引つ張られている。最後にそつと抜き終わると、長老はその棒を丹念に眺めた。

棒の先端は鋭く尖っている。

長老が何事か若者に話しかけた。若者はうつむいて、握りしめた右手を老人に差し出した。親指だけがぴんと上に伸びている。

長老は若者の手を取り、親指の爪と肉の間に棒の先端

を当てがうと、そのまま突き刺した。

若者はグラアゴと叫び声を上げた。それでも逃げずに痛みに耐えていた。

長老は少しづつ棒を爪と肉の間に通していき、根元まで達すると最後に一気に跳ね上げた。爪が血と供に跳ね飛んだ。

すかさず娘が寄って来て、草を親指に縛り付けた。男達は歓声を上げた。

長老の宣言により祭りが始まった。村の者皆に酒や家畜の肉が振る舞われた。人々は輪になつて踊り、歌った。その日の晩、親指に草を巻き付けた若者は、むしろの上で娘と抱き合っていた。若者は獣のようにオホウホウと雄叫びを上げた。

風の谷のナントカ

船渡川広匡

巨大な蟬が電柱の上の方にへばりついていた。

体長はゆうに二メートルはある。羽の部分を入れたらもつとだろう。それが今、壊れた火災警報機のようにオシツクツクボーウシと鳴いている。

僕は両耳を手でふさぎ、その様子を眺めていた。

道の向こうの方からスーパークラブがこちらに走って来た。ジェットヘルとゴーグルで顔はよく見えない。青いワンピースが風でひらひらしている。僕の近くまで来ると、ゴーグルを外した。少女だった。

「なんて立派な蟬！」

少女はそう言いながら筒のようなものをポケットから取り出し、片手で上にかざした。スーパークラブを軽く走らせると筒に風が入って行き、キーンと超音波のような

ものを発している。

「森へお帰り。ここはあなた達の住む場所じゃないわ」

少女は諭すようにやさしく言った。

アクセルをふかして少女は走り去った。蟬はスーパークブの後を追って飛び立った。

僕はさつき起こった事をぐるぐると考えながら、独り住まいのアパートに帰った。

玄関のドアを開けようとしたら、鍵が開いている。閉め忘れたのかと思いつつ中に入ると、部屋全体にコケヤシダなどの植物が繁殖して一面緑になっている。しかも巨大な蟬の群れが張りついていて、それぞれがまるで朝の灯台のようにけたたましい音で鳴き始めた。

僕はとっさに部屋を出て玄関のドアを閉め、外から鍵をかけた。

これは一体どういう事だ。

「森へお帰り」

青いワンピースの少女がフラッシュバックする。

改めて表札を見ると、「森」と書いてある。

そうだ。おれは森なのだ。

肉人間

船渡川広匡

救急車のサイレンの音がやけに近くまで来ている事に気づいたのは、夜の高円寺のアーケード街にあるレストランで食後に読書に没頭している時だった。窓越しに店の外の様子を伺うと、叫び声やら逃げ惑う人々やらで騒がしい。

道路の真ん中に極端に太った全裸の人間が立っていた。体中に贅肉がだるだるについていて、頭は丸坊主。性別はさっぱり分からない。肉人間だ。

と思った時、そいつと目があつた。実際には贅肉のせいでどこが目とも鼻ともつかないが、明らかにそいつは僕を見ている。

その時、一人の警察官が小走りにやって来て拳銃を構えた。何やら叫んでいる。肉人間は構わずそのまま近寄

って行くと、自分の腹の肉をちぎって警察官の顔面にべたりとはりつけた。肉は男の顔面に一体化し、贅肉だらけになって目も鼻ももうずもれてしまった。倒れてうめいている。

それから肉人間は肩をいからせてほっほっと歩きながら、自動ドアを通って店内に入ってきた。店内は騒然となった。僕は残りのコーヒーを飲みながら、そういった辺りの様子を自分でも意外な程静かな心持ちで眺めていた。

肉人間はそのまま厨房に入っていく、自分の腹の肉をぶちやりと手でもぎ取ると鉄板に乗せて焼き始めた。ジュワーと肉の焼ける音が聞こえる。意外にも手際良く塩胡椒を振っている。時折油が跳ねるらしく、両足をじたばたさせながら手で腹をこするなど奇妙な動きをする。やがて焼き上がった肉を鉄板に乗せ僕のテーブルに運んで来た。肉人間は僕の顔を見て、笑っているように見えた。

僕はしばらく思惑していたが、あきらめてフォークとナイフを使って肉を切り分けてから、肉を念入りに観察

した。白い脂肪の塊だ。よく火が通っている。

思い切って口に運んだ。でろりとした食感。少し飲み込んだ後吐き気がして、床にばへっと出した。

そこへ武装した警察官の連隊が盾を構えて突入してきた。

警察官達は素早く近づいて来て、肉人間と僕を強引に取り押さえた。もみくちゃにされる中で、なぜか僕のがちぎれて脱げた。警察官達はそのまま店の外に止めた護送車に僕達を連行しようとした。

その時、店内の窓が鏡のように反射して、自分の姿が見えた。

髪がばさばさに抜け、裸になった上半身が、だるだるの贅肉で覆われていた。

次世代作家養成塾 塾長 ^{みずき} 水城 ゆう

1957年、福井県生まれ。

東京・世田谷在住。

作家、ピアニスト、演出家、コンテンツプロデューサー。

NPO法人 現代朗読協会 代表。

著書 『原発破壊』 電子ブック

『オーディオブックの真実』 電子ブック

『音読・群読エチュード』 ラピュータ

『祈る人』 アイ文庫

『浸透記憶』 アイ文庫

『麵喰紀行』 碧天舎

『情報活用術』 ブックマン社

『ジャズの聴き方』 ブックマン社

『水城式ピアノの弾き方』 山海堂

『携帯パソコンの仕事術・遊び術』 メディア・テック出版

『紺碧の少女——南洋の奪取作戦 1943』 ログアウト冒険文庫（アスキー）

『赤日の曠野』 青峰社

『小説工房 Vol.2』 青峰社

『小説工房』 青峰社

『夢巫女・美緒』 ログアウト冒険文庫（アスキー）

HiYoMeKi 第1号

http://ibunko.com/online_text.html

2011年9月7日 第1刷発行

編著者 ^{みずき} 水城 ゆう

発行者 有限会社 アイ文庫

〒156-0042 東京都世田谷区羽根木 1-20-17

<http://ibunko.com>

©2011, MIZUKI Yuu